



森が福祉に



できること VOL.2

こころとからだをやさしくつむ“バリアフリーな森林”づくり



NPO 法人 MORIMORI ネットワーク
連携:「あらかわモデル」創造プロジェクト



2016 年より取組んでまいりました「森」と「福祉」のつながりを創造する事業は2年目となりました。今年度も、荒川区の福祉施設の職員さんとそれを支援する専門家たちで構成されている団体「あらかわモデル」創造プロジェクトと連携しながら行いました。テーマは“障がいのある方や、高齢の方にも訪れてもらえる森林とは？”その実現に向けて、こころとからだの両面からさまざまな試みを行いました。森のよさを感じてもらい、一緒に楽しめる森林の実現には課題もたくさんありました。

また、生活実習所と作業所で、木や森の素材を使い、森と出会ってもらうためのワークショップを行いました。森の風が施設に吹き、利用者さんたちにそのパワーをそそいでくれました。

「森」と「福祉」とう大テーマはまだまだこれからですが、障がいのある方、高齢者の方にいろいろと教えてもらいながら歩んで行きたいと思っております。

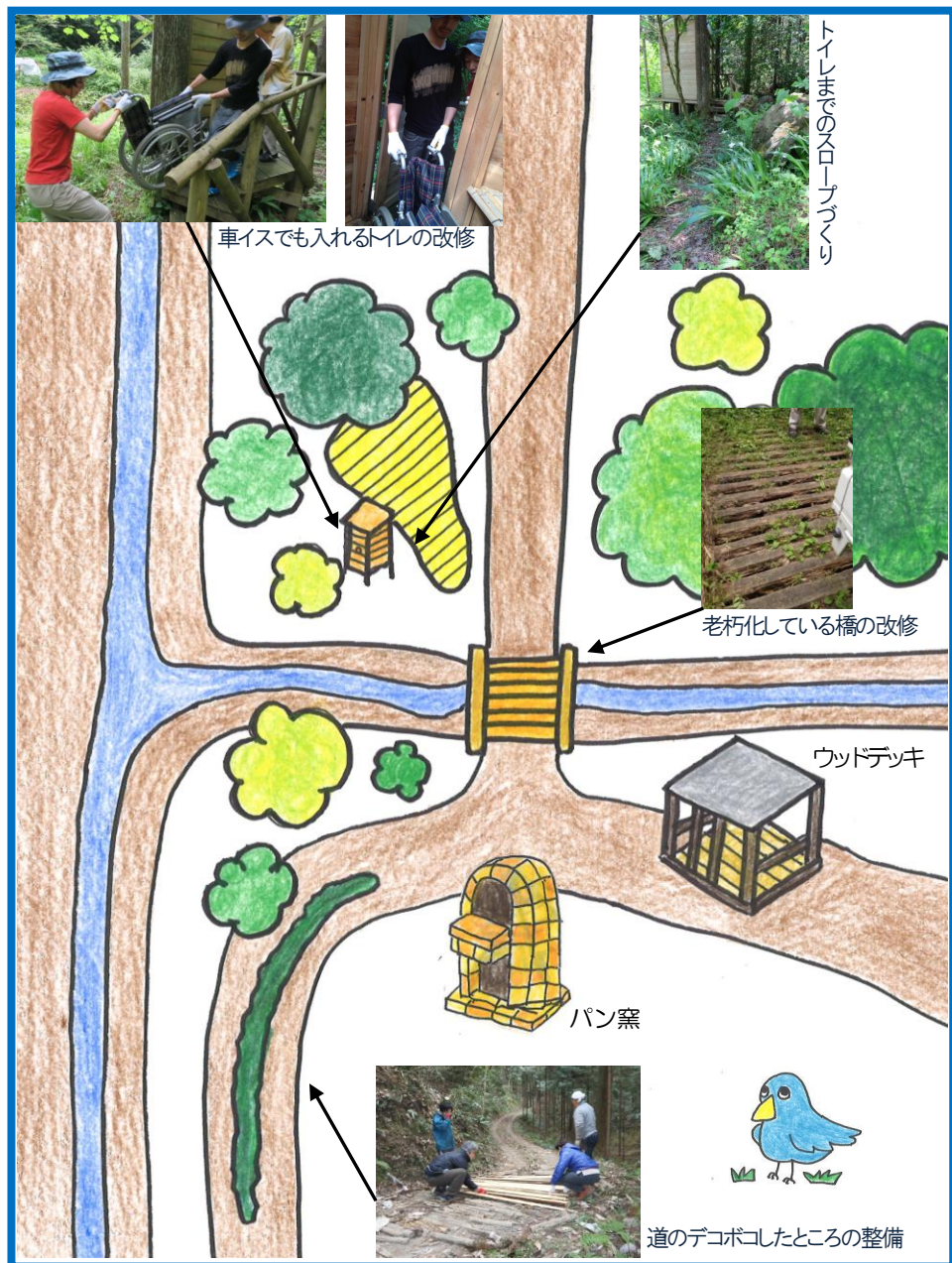
事業の実施にあたり、ご協力をいただきました多くのみなさまに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

NOI 法人 MORIMORI ネットワーク一同



● “バリアフリーな森” のための構想 ●

車イスの方も楽しめる森林への整備



●道の整備●

西武線の吾野駅から県道を歩いて約 30 分、川沿いに細い道を入ると、そこは急に森の小道。その道が“みんなのセラピーランド”へと続いています。この道は森林の手入れのための作業道なので、普段は軽トラックなどしか通りません。森の雰囲気車をイスの方にも味わってほしいので、やりすぎないように注意深く整備を進めます。途中で大きくカーブしているところは、道はデコボコ、ゴロゴロと石もあり、少しの雨でもぬかるむので、そこは整備が必要です。



森の小道の入口は大丈夫



このあたりは車イスでも問題ありません



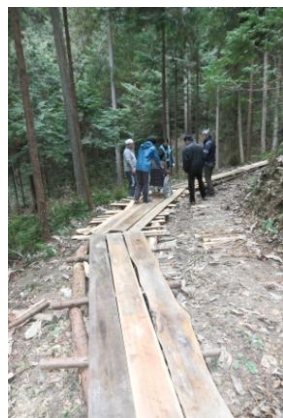
ここが問題のカーブ。いろいろとやってみます



チップを敷くのがいいか、板を敷くのがいいのかといろいろ考えた結果、車イスの方が来たときに仮設で板を敷く事になりました



かつて、伐採した木を搬出する時に「木馬」と呼ばれる箱に木を乗せました。その方法からヒントを得ました。



立派な板の道ができました。これなら車イスでも安心です

●トイレの改修●

トイレは車イスでも入れるように扉を広げ、介助者も一緒に入れるよう部分的に壁を壊して広げます。車イスがUターンできるように踊り場を広げます。バイオトイレは下におがくずを入れたドラム缶を置いているので、高床式になっています。そのためにトイレの手前が階段になっていますが、これも車イスでは無理なので、スロープに変更します。



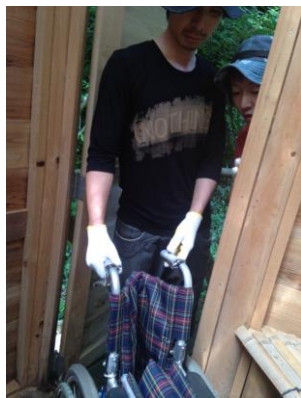
現状のバイオトイレ



おがくずが入ったドラム缶



狭い階段を車イスを上げるのは難しい



やはり、扉から車イスは入りません



改修のために階段と踊り場を取り壊します



壁を壊して扉を広げます



扉は両開きにして、介助者も一緒に中に入れるようになりました。ドアの前も広くなり、Uターンも可能に

●トイレのためのスロープづくり●

トイレへ行く道は人が一人やっと通れるような道であり、大きな石もゴロゴロとあり、車イスで行くのは難しい。なだらかなスロープを作り、安心して車イスでも通れるようにします。

トイレ周辺の様子



なだらかなスロープをつくるために、きっちりとした土台をつくる



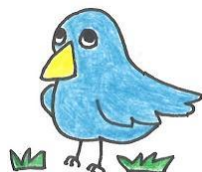
防腐剤を塗ります



板を敷いて打ち付けて行きます



約10m のなだらかなスロープが出来上がりました！



●老朽化した橋の改修●

トイレに行くためには、橋を渡らなくてはなりませんが、橋は古く老朽化していて、車イスで通るのは危ない。プロに頼らずに間伐材を使って、自分たちで橋をかけてみることにしました。



老朽化して隙間ができてしまった橋



橋の材料となる木を間伐します



製材機にかける前に余分な皮を剥ぎます



製材機で丸太をうすく切ります



製材した板を並べてみました。なんとか橋として使えるようです



イベントに間に合いました！ 渡り初めです

●障がいのある方と森林療法●

森林療法の第一人者である上原巖先生から、知的障がい・精神障がいのある方の森林療法を中心にお話を伺い、実際に一緒に森へ行き森林療法を体験しました。

森林療法と森の手入れ

現在は人間だけではなく森林も病んでいます。東京都の森林率は50%で、森林率は高いのですが、同時に手入れされていない森林がとて多いのです。自然林は自然の摂理でできていますので、そのまま見事に育っていきませんが、人が植えた森林は、自然の摂理とは違う密度で木が植えられていますので、最後まで人が責任を持って手入れをしなけば育たないようになっています。これを私は森林療法に取り入れています。

森林療法は子供から高齢者、障がい者、社会的な弱者も含めて、地域の森林を回復しながら、自分自身の人間性も回復していきます。森を手入れしながら、作業療法を行ったり、カウンセリングをしたり、自分の居場所を作ったりすることで、放置されていた森林がその方にとってかけがいのない森になっていきます。



熱をこめて話す上原先生

森林散策だけではなく作業をすることの大切さ

これまで、全国の病院・福祉施設で森林療法を行って来ましたので、その例をお話します。鹿児島県霧島市にある病院では、認知症の方が多く入院していて、作業療法士さんに手を引いてもらって歩行訓練をします。最初はいやがっていたおばあちゃんも、森にコースを作ってから歩くようになりました。会話も短時間ですが成り立つようになり、この前歩いたところを歩いてみたいとか、記憶が結びつくようになりました。

私が働いていた長野県の知的障がい者の入所施設では、重度の障がいを持つ方が二人一組で桜の木を植えます。一人は木を押さえる係、もう一人は土をかける係、このコンビネーションがうまくいかないと木は倒れてしまいます。お互いの会話が無いのですが、気遣いながら、木がちゃんと立つようになります。他にも赤いテープのついた丸太を自分たちで見つけて、おたがいにアイコンタクトをして、一緒に持ち上げて目的地まで息をそろえて運びます。

散策だけより作業をやった方が圧倒的に効果がありました。たとえば、一本でも木を運んだということがその方にとってプラスになる。「俺だって運べた」ということが自己肯定感を高めます。



芳香蒸留水の簡単な作り方も教えていただきました



上原先生と一緒に森へ

森林療法で改善される症状

30代の男性ですが、ティッシュペーパーや石鹸をかじってしまう異食行動がありました。夜中ずっと走っていたり、眠れないと、逆立ちして過ごしたりもしていました。森林療法を始めると、そういった行動がゼロにはなりませんが、とても少なくなりました。週に4日も山に出かけて作業をしていれば、疲れているせいではないかとも言われましたが、それだけではなく、配膳を手伝ったり、洗濯物をたたんだり、施設内での行動に変化がしました。いつも耳をふさいでいる自閉症の子がいました。集団行動が苦手で、作業から離れて、一人で過ごすことが多く、1年目は散策のときも耳をふさいで一人遅れて歩いていました。2年目の6月頃から、話せない子なのですが、丸太をみんなが運んでいると、脇を上げてここにはさんでくれという動作をするようになりました。そのうち、耳から手を離すようになり、木を自分で持てるようになりました。最終的には「写真を撮るよ！」というポーズをとるようになりました。この子は室内では音がとても気になって、蛍光灯の音も拾ってしまうのです。森の中でもザワザワと音はしているのですが、人工音ではないと反響が違うようです。



居場所づくりのために、まず一本の木を切る



一本の木をみんなで短くする

森は無言で受け止めてくれる

親からの虐待を受けた PTSD の子どもたちがいる病院でも行いました。薬も効かない子どもたちに、病院では最後の手段ということで、週に3回医師がついて、森林散策を中心に森林療法を行いました。病院側の期待は、症状が少しでも軽くなればよいということでした。森へ行くにつれて、子どもたちのストレスに反応する物質がどんどん少なくなり、行動チェックリストをみると、攻撃性とか社会性とかがだんだんといい数値になっていきました。「森が子どもたちの傷ついた心を受け止めてくれる環境で、とてもよかった。」と医師たちが言いました。森が無言であることが一番よかったのです。何も言わないのが、子どもたちにとって最高によかったのです。

もし、毎回、ああしなさいとかこうしなさいとか、お説教のようなことを言われていたら、子どもたちは一回でいやになってしまったと思います。



切った木で囲み、居場所ができました



森をまるごと感じたい

視覚障がいの方とも行っています。森を歩きながら、砂利道があったり、障害物があったりするので「バリアフリーとか、ユニバーサルデザインとかじゃないとダメですね。」と言うと、「それは健常者の方が感じることです。もちろん、そういったことが大切なところもありますが、私たちは森と言えば、泥んこになったり、転んだりすることを、十分覚悟して来ています。すべすべしたところではなく、森をまるごと体験したい。」と言われました。

クマの爪痕を触ったり、草に座ったり、鹿の糞の匂いを嗅いだり、風の音を聞いたりします。ヤブを歩くと、危ないなあと思って、笹をはらったりするんですが「全部そうやられてしまうと、私たちは森は何にもないところだと思ってしまいます。ここに枝があります、これがサルトリイバラですと、手を添えてもらいたいのです。風景の説明もはぶかず、色やかたちも言ってください。」私もお叱りを受けながら、大切なことを教えていただいています。

森が健康になれば人間も健康になる

私が行っている森林療法は、人が手入れしていなかった森林などを使って、病院や福祉施設の方、地域の方と一緒に社会福祉活動であり、地域コミュニティづくりです。「こんなところに人が来るのかな」地域の方がいぶかしがるどころそ、みんながまた戻って来なくなるのです。「あそこどうなったんだろう。木を切ったところはどうなっているのだろう」と、自分が手を加えたところに対しては、そういう気持ちが大きいので、また戻って来なくなるのです。

木を切ると空間ができるので、そこに寝そべって見上げると、樹冠が広がって空が見えます。これをドイツの営林署の方が“緑の目”と名付けたんです。風が吹くとそれが大きくなったり、小さくなったりする。しばらく眺めっていると眠くなります。脳波測定をしたら、10分で α 波が高まってリラックスして、それで眠くなるそうです。不眠症の方にもいいんです。木を切れば、森に光が入り、日当たりもよくなり植物も育ちます。

「森林が健康になれば、人間も健康になる」はずです。美しく手入れされた森林は、人間の健康を高めると思っています。



わあー！気持ちがいい



切り株に座って瞑想する



木の皮がむけた！

上原 巖 氏プロフィール

1964 年長野県生まれ。東京農業大学農学部林学科卒業。ミシガン州立大学農学部林学科留学。信州大学大学院修士課程、岐阜大学大学院博士課程修了。農学博士。日本カウンセリング学会認定カウンセラー。日本森林保健学会理事長。「みんなの森」代表世話人。長野県高校教員、社会福祉施設職員などを経て、現在、東京農業大学森林総合科学科教授。主な著書：「森林療法序説」「実践 森林療法最前線」「ジョン・レノンが愛した森 夏目漱石が癒された森」「元気になる 日本の森を歩こう」「回復の森」他多数。

●森の癒し体験●

森に入ると、木々のざわめき、川のせせらぎ、風の音を感じてそれだけで気持ちがよく、心身ともにリフレッシュされていきます。五感をより活性化させるために森での癒し体験を試みました。

■クリスタルボウルの演奏■

クリスタルボウルは 99%以上水晶から出来ていて、澄み切った透明な音色が心を癒してくれます。人のチャクラにも対応した設計の楽器ですので、チャクラの学びをしながらも、想いをテーマに、どの言葉が一番良い音に聴こえるか？を色々試みました。その中で一番良かった言葉が「愛しています」。この自然の中で演奏できる恵みに感謝して、すべての存在に「愛しています」を音に乗せて届けたいと思います。(斉藤勉)



クリスタルボウルについてのお話



こことからだに気持ちのいい音が響きます

■昔ながらの自然茶をいただく■

“お茶を楽しむ会”を主宰する近藤美知絵先生は、40年間全国を歩き、山に自生する自然茶を求めています。野生のお茶の木は、自然の恵みを十分に吸収していますから、飲むほどに気持ちが穏やかになります。森でいただくときは、姿勢を正して気を集中し、森の環境と一緒にいただきます。



四国の山で育った“ばんぱら茶”



森の空気と一緒にいただきます



近藤先生から野生のお茶についてのお話



お煎茶は一滴一滴を大切に味わいながらいいただきます

●「森」と「福祉施設」がつながる時間●

森の風を「福祉施設」に届けて、利用者さんと一緒にものづくりをしようと、荒川区にある生活実習所と作業所でワークショップを開きました。使う素材は、木の板、葉っぱ、枝、ツルなどなど。組み立てたり、色をつけたり…一人ひとりがそれぞれの表現で作品づくりを楽しみます。森のやさしいパワーを感じて、潜在している表現力がだんだんと呼び起こされていくのを実感します。

■森のオブジェづくり■

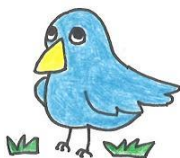
森から届いたいろいろな素材を使って、思い思いに組み立てていきます。利用者さんたちは迷うことなく、素材を手に取り、作品を作り上げます。この日は夏休みの小学生たちが手伝いに来てくれました。



森から届いた小さな板、枝、葉っぱがテーブルの上に広がりました



みんな作品づくりに夢中です。どんなものが出来るのでしょうか



小学生たちも一生懸命に手伝ってくれました

■色をつかって木に描く■

ワークショップでは、利用者さんたちの大胆な色づかいにいつも驚きます。それぞれが思い浮かんだ絵を描いていくとき、それは私にわかるものであることもあります。まるで感情をそのまま描いたようなものもあります。

★フラワーポット★

組み立てるところから始めます。フラワーポットのかたちが出来上がったら、側面に絵を描きます。次々に楽しい作品の出来上がり！これにどんな花が入るのかな？花が負けてしまいそうなフラワーポットもあります。



ネジで留めて組み立てていきます



みんな真剣に描いています。大胆なもの、繊細なもの、懐かしいもの…一つ一つユニークです



後ろ姿から真剣な様子が伝わります



★羽子板★

家に持ち帰って家族と楽しめるものを作ろうと、羽子板づくりをしました。絵を描いた人、紙をちぎったものを貼った人、葉っぱをつけた人…同じものは一枚もない！羽子板が勢ぞろいしました。



羽子板は森の木を加工して講師の先生が作ってくれました

羽子板がずらりと並ぶと壮観です。



■みんなでベンチをつくる■

自分たちが座るベンチをみんなでつくろうということになりました。初めて共同創作に挑戦です。ベンチは組み立てることから始めて、色を塗って完成。施設の職員さんからの提案で、これを“東京ブリュット展”に出展することになりました。障がいのある方の芸術活動は“アールブリュット”と呼ばれていますが、展覧会もさかんに行われていて、その中の一つです。出展作品として、ベンチに加えて、木に見立てた大きな板絵も描きました。

★ベンチ★



ノコギリもずいぶん慣れてきました



ビスでとめて、ベンチを組み立てていきます



ベンチの左側は青系の色、右側は赤系の色で塗っていきます



出来上がりました！

★大きな板絵★



大きな板の中央に皮がついたままの木を打ち付けて幹に見立て、その周りに花や、枝などなどいろいろと思いつくものを描いていきます。みんなが思う森のイメージが完成。



“東京ブリュット展”出展作品です

■施設公開に向けた飾りつけ■

施設公開には家族、地域の人をはじめとたくさんの方が訪れます。お客様をお迎えするので、施設内を楽しくにぎやかな雰囲気にと飾りつけをしました。

★木の皮と板に描いた絵で壁を楽しく★

白い壁を何とかカラフルにしようと、職員さんからの提案でみんなでつくりました。



木の皮に手形を押したり、絵を描いたり



色鮮やかな作品がたくさんできました



看板も素敵な仕上がりです

★絵馬を天井から吊るす★

天井からも絵馬を吊るしてにぎやかにします。



吊るすための穴を板にあけておきます



色とりどりの絵馬の出来上がり



穴にヒモを通します



上を見上げても、楽しい作品でいっぱいになりました

■森の恵みを育てる■

施設内で森の恵みを育てたい。そんな思いでシイタケのコマ打ちをしました。シイタケ菌を原木に植え付ける作業です。原木からシイタケが顔を出すのは、来年の秋、楽しく育てていきましょう。



シイタケ菌を植え付ける原木に電動ドリルで穴をあけます



シイタケ菌を穴に打ち込んでいきます



原木を立てかけて置く丸太にも色を塗りました



施設の北側の日の当たらない場所に置きました。楽しみ！

●「森」と「福祉」が会う場所を訪ねる●

■フラッグスデザイン■

福祉施設から生まれる質の高いものづくりを目指して

特別支援学校の卒業生が誇りを持って社会生活を送れるようにと、(故)ヨーガン・ルールさんの家具のメンテナンス工房として 2000 年に開設。優れた製品が自分たちと社会を結びつけると考え、オリジナルの木製品もつくるようになりました。

松田光二さんのお話 (NPO 法人 FLAGS 代表理事)

これまでのあゆみと取り組み

最初はこの近くの福祉施設にボランティアとして関わりました。私は空間デザイン、店舗のデザイン、家具のデザインなどを手がけていて、ものづくりのプロでしたけど、その頃の福祉施設は、ものづくりにはあまり前向きでないように感じました。それであれば、自分たちで“ものづくりをする場所”として作業所を起こして、自分たちのオリジナルなものを作って世に出していこうと始めました。“フラッグス”は旗です。「俺たちここにいるぜ！旗を持とうぜ！」という意味でつけました。



代表理事 松田光二さん

障がいのある方とのものづくり

名前を知ってもらいたいと思い、コンペやクラフト展などに参加して、知り合いを増やしてきました。コンペはできるだけ利用者さんと一緒に行くようにしています。「あなたたちが頑張って作ってくれたのがここにあるよ」と説明します。それが目に見えて出てくることはないような気がしますが、ただ、もの言わない彼らの心の中には、かたちとして残っているのではないかな、という希望を持っています。

われわれの仕事の基本になっているのは、訓練だと思っています。同じものを繰り返し繰り返しつくりながら質を高め、利用者さんの技術を高くしていこうとやってきました。

通常で流れている仕事は、8割は利用者さんがやっています。試作をして、原型をつかって、そのトレースから利用者さんの仕事が始まります。板に形をトレースして、糸ノコで切り出す。彫る作業も一部は利用者さんがやります。糸ノコはぼくよりはるかに上手です。丸ノミを使って彫って、電動のサンダーを使い、最後のフィニッシュでキズがないかどうかまで利用者さんがやります。

一回自分の中で段取りを覚えた利用者さんは、どんどん自分でやってくれます。糸ノコをやっている子も「ホイキタ！」という感じで、どんどんやるので、こっちが間に合わなくなります。



ズラリと並んだ楽しそうな製品



カラフルに色づけされたアクセサリーのパーツ

私が教えてもらったこと

重い自閉症の利用者さんがいました。言葉は上手く出てこないのですが、やっているのを見て、削る作業、切る作業をやってくれました。以前は手の糸ノコ使っていたんですが、その子が切ると煙が出てくるんです。そのくらいパワーがありました。その彼が削っているのを見て、形はシンメトリーじゃないけど、何かいいなあと思いました。みんな同じ形でなくていいんですよ。同じものの方が大量生産するのにいいということだけです。一個一個作るのだから、その一つ一つの形が、美しかったり、楽しかったりする完成度があればいいんじゃないか、そういうことを逆に教えていただきました。

ゆったりとした環境の中でゆっくりやる

この作業は単純な作業が多く、一日中緊張し続けてやるような仕事ではなくて、眠くなったり、ふらふらしたくなります。それはそれでよしとして、とてもゆい環境の中でやるようにしています。冗談を言って笑ったり、できるだけ楽しい環境をつくって、その中でゆっくりやるよ、という感じです。

ここでやっていて、「すごいね」と言われるとその気になってしまいますけど、それってダメですね。だから、今でもコンペに出すようにしています。客観性を大事にしていきたいです。

それと、はっきりモノを言うてくださる方にまわりいてもらうことが重要です。「これはいいけど、これはだめだね。」とか、そういう話はとても参考になります。ガラスも、自分たちの世界だけでは表現できないものをガラス作家の方から学習しました。他ではやってないと思いますけど、植物染料で色をつけることもします。わりと新しいこともできているのではないかと思います。



五色の箸置きセット



ミを使ってお皿づくりを体験



木の表情が美しいお皿



糸ノコも体験してみます

これからの夢

最近、気がついたことは「自分たちだけでやろうと思ったら、限度があるじゃないか」ということです。もっと横のつながりをつくって、その中でもものを作っていけば、さらにバリエーションも広がるし、他の方の力もいただけます。

陶器を作っている方に会って、製品の一部を陶器でやってもいいのではないかと思います。木の箸置きだけでなく、陶器の箸置きもいい。縫製の得意な作業所さんと一緒にやるのもいいですね。自分のところだけで完結するのではなくて、一緒にやることで販路も協力し合えると思います。私は造形関係の出身なので、造形面でみなさんに協力して、役に立つことができれば、福祉関係の中で質の高いもの、クオリティの高いものが生産できるのではないかなという思いがあります。そんな夢を持ちながらやっていきたいですね。

■ クラリスファーム ■

共に暮らし、仕事をするパートナーとして

日本の福祉制度に基づく通所の福祉作業所や特例子会社、一般企業での雇用のほか、ヨーロッパでは、障がい者が働く第三の分野としてソーシャルファームなどと呼ばれ、社会的目的を事業として行う場があり、日本でも同様の試みがはじまっています。

クラリスファームは1993年に埼玉県熊谷市で知的障がい者の生活寮としてスタート、障がい者とともに生活をし、働き、彼らが社会の一員として活躍できるようソーシャルファームとしての挑戦を続けています。知的障がい、精神疾患の方だけでなく、ニート、受刑後の退所者、シングルマザー、高齢者など社会で働きにくい方々も受け入れ、多様な人たちと働いています。現在行っているのは、オリーブの森の運営の他、水耕栽培を中心とした農業です。

新井利昌さんのお話(埼玉福興株式会社 代表)

今30人一緒に生活しながらやっています。自分たちで事業を作っていけないと障がい者の仕事はないです。1993年に始めて、障がい者ができる仕事をやっていましたが、低賃金だったのと、時代の流れで、単純作業はだんだん機械化になりました。いつまでも下請けをやっていると切られる。「下請けはやめよう」とその時に思いました。

オリーブをやろうと思ったのはまったくのひらめきで、小豆島に行って、300本の苗木を持ってきたのが始まりです。利根川が近いので、その氾濫によってもたらされた砂の混ざった土と熊谷の夏の強烈な暑さ。それがオリーブが育つのを助けてくれましたね。

ここには、犯罪をおかした障がい者や障がい者施設からはじきだされた障がい者もいます。一人一人は行き場のない人間たちです。30人が一つの家族として、できることをおたがいにこぎないながらやっています。

うちは株式会社なので、みんなで頑張って働いていかなければなりません。私はみんなをパートナーととらえています。彼らがいないと事業ができないわけですから。



代表の新井利昌さん



温室で行われている水耕栽培の様子



オリーブの森の説明を聞く



メンバーの方と一緒にオリーブの剪定を体験

ソーシャルファームという新しい試みの最先端を走る新井さんからは、新しい未来を見つめてゆるがないものを感じました。

～NPO 法人 MORIMORI ネットワークの活動～

山村と都会の暮らしを結び、次世代によりよい環境を手渡したいと願い、1995年に設立しました。山村と都会に暮らす人々の交流を通じて森林の保全や再生、都市に暮らす人々の自然体験への機会や心身の健康への力となる場をつくる活動を行っています。森林に関心のあるさまざまな方たちとゆるやかな繋がりをつくりながら未来の森のあり方、暮らしのあり方を模索しています。



事業内容

- 1 森林と都会を結ぶ交流事業
 - ・みんなのセラピーランド
埼玉県飯能市風影
 - ・バースデーランド
秋田県北秋田市森吉山
岩手県岩泉町早坂高原
栃木県矢板市
 - ・子どものための「森の基地づくり」
埼玉県飯能市風影
岩手県岩泉町配羅郷
- 2 エコの発想でつくる 森の中の造形物づくり
ツリーハウス バイオトイレ ウッドデッキ
サークルハウスなど
- 3 森の本 出版・編集
 - ・日本の林業(編集 岩崎書店刊)
 - ・子どものための森のガイドブック
 - ・「森と水の国 岩泉」
- 4 森と福祉の連携事業
 - ・福祉作業所との連携事業



バイオトイレ(埼玉県飯能市)



作業所の職員さんの間伐体験



森吉山「バースデーランド」で植樹



球体のツリーハウス(飯能市)



岩手県岩泉町森の実験室基地

森が福祉にできること VOL.2

～こころとからだをやさしくつつむ“バリアフリーな森林”づくり～



NPO 法人 MORIMORI ネットワーク

〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-3-7 アルタ平河町ビル 2F

TEL 03-5226-3305 FAX03-5226-3322 <http://mori-mori.org>

発行日：2017 年 3 月 31 日

発行者：NPO 法人 MORIMORI ネットワーク

連携：「あらかわモデル」創造プロジェクト

協力：荒川生活実習所 荒川福祉作業所 NPO 法人かがやき

NPO 法人 FLAGS 埼玉福興株式会社 シェイドツリー・ユニット

制作：NPO 法人 MORIMORI ネットワーク 長井八美

写真：前川健彦他

デザイン・イラスト：渡辺なほみ

「あらかわモデル」創造プロジェクト

東京都荒川区を中心とした福祉施設等の職員と支援する仲間で構成。情報交換・研修・研究等によって、福祉施設をとりまく課題解決と技術力・支援力向上を目指して活動している。

平成 28 年度 新たな木材需要創出総合プロジェクト事業

木づかい・森林づくり活動の全国的な展開のうち森林づくり活動